

# 「神の内なる一匹のハエは 実在する最高位の天使より高貴である」

——エックハルトにおける創造が与えるものとしての存在について——

西村 雄太

## 0 はじめに

エックハルトはその『ドイツ語説教』第12番 (Cf. DW I, 199, 1-6)<sup>1)</sup>において、神の内における一匹のハエが、実在世界に存在する最高位の天使よりも高貴であると主張している。このような主張は、神の内にある存在者が、神の内なるアイデアとして実質的には神そのものであるから当然のことだ、として片づけられてしまうことがある<sup>2)</sup>が、それでよいのだろうか。確かに、神の内なる存在者が神の内なるものとして神の生命と等しいと理解されること自体は、以下に示すエックハルトのラテン語著作にも見られ、またアウグスティヌス以来スコラ学においても一般的な見解である。

「創造された諸々の事物のなかで第一のものは存在である」という言葉にあるように、創造可能性の説明根拠 (ratio creabilitatis) は《存在》<sup>3)</sup>であることに注目されたい。このことから、神から産出され

---

1) エックハルト、アルベルトゥス、ヘンリクスからの引用はそれぞれ、コールハンマー版全集、ケルン版全集、ルーヴェン大学版全集に基づく。出典表記は著作名、その巻章節、全集における巻数 (ローマ数字)、頁、行数の順に行う。

2) K. Albert, *Meister Eckharts These vom Sein: Untersuchungen zur Metaphysik des Opus tripertitum*, Saarbrücken; Kastellaun, 1976, S. 243.

3) 本稿では、“esse”及びその派生形が「創造が与えるもの」・「創造と関係するもの」

た事物は、たとえそれが存在者であり、生きており、知性認識するものであるとしても、ただ《存在》を説明根拠として創造可能である。それゆえ、仮にも何かが生きていたり知性認識したりして、かつ生きることや知性認識すること以外の何らかの存在を有していないということがあれば、それはそのようなものとして創造不可能であろう。したがって、“quod factum est in ipso vita erat” (ヨハネ 1) は意味深く微妙なニュアンスで (signanter et subtiliter) 語られたものである。つまり、この言葉が言わんとするのは、神から生じたもの (ipsum factum a deo) は、確かにそれ自身の内では (in se ipso) 《存在する》 (est) わけだが、神の内においては (in deo) 〈生命であった〉 (vita erat) のであり、神がそれ自体創造不可能であるように、生命として創造不可能なものであった、ということである。(In Sap., n. 24; LW II, 344, 5-345, 1.)

神によって産出された事物は、存在するものであったり、生命を持つものであったり、知性認識するものであったりするが、それが〈創造されたもの〉と理解されるのは、ただ《存在》という観点・説明根拠に基づいてのみであるとされる。そして、事物は、それが神の内にあった (erat)<sup>4)</sup>時には、創造不可能な生命そのものであった。

このテキストに見られるような理解が、神の内なる一匹のハエの高貴さを語るうえで重要な役割を果たしていることは言うまでもないだろう。問題となるのは、なぜ事物をその根源において、すなわち神の内なる生命において捉える視点をエックハルトが強調しえたのかという点である。被造物が創造以前に非被造的な生命そのものであった (erat) としても、実際には被造物は創造されたのであり、もはや神であるところの生命そのものの内にはないことは動かざる事実であろう。トマスがエックハルトのような強調を行っていないことからしても、神の内なる事物

---

という含意を伴って用いられていることを明示する際、《存在》・《存在する》などと表記する。

4) この聖句 (ヨハネ 1:3) の解釈に際して、未完了形 “erat” に神の内なる事物の非被造性を読み取るのは、アウグスティヌスを由来とする中世では一般的な解釈である。(Cf. E. L. Miller, *Salvation-History in the Prologue of John*, 1989, Leiden, pp. 53f.)

の高貴さを彼が強調する理由は明白ではない。

本稿の目的は、「創造とそれが被造物に与える《存在》」に関するエックハルトの理解を明らかにすることで、上記の問題に答えを出すことにある。そのために、このテーマに関するアルベルトゥス・マグヌスおよびガンのヘンリクスの解釈を確認し、その解釈を基にエックハルトの理解を明らかにするよう努める。

### 1 アルベルトゥスにおける第一に創造されたものとしての《存在》

アルベルトゥスとヘンリクスの《存在》理解を把握するうえで重要なテキストは、先のエックハルトの引用にも見られた『原因論』第四命題——「創造された諸々の事物のなかで第一のものは存在である (*prima rerum creatarum est esse*)」——に対して両者が注解を行っている箇所である。この第四命題は『原因論』の中でもとりわけ好んで引用され、解釈上の問題が起こったことで知られているが、トマスとその師アルベルトゥスとの間にも、明確な解釈の相違が見受けられる<sup>5)</sup>。すなわち、「創造された第一のもの(事物)としての存在」を、トマスはあくまでも第一原因に最も近接する知性実体 (*intelligentia*) に分有された存在であると理解するのに対して、アルベルトゥスは、そうした解釈の可能性を知らながらも、敢えて「能動知性の光によって存在へと産出された形相であり、その単純な光のうちで把握内容 (*intentio* 志向性) を介して受け取られたものとしての“*intelligentia*” (知解物)」(*De causis et proc. univ.*, 2. 1. 19; XVII/2, 83, 64-67) であると、すなわち、以下の箇所で述べられているように、「精神の単純な抱懷物」であると解している点である。

実際、〔創造された第一のものとしての〕《存在》は何に対しても形成ないし規定されていないような精神の単純な抱懷物 (*simplex mentis conceptus*) であり、この抱懷物によって事物は、それについ

5) この点に関する詳細については、P. Porro, “Prima rerum creatarum est esse: Henri de Gand, Gilles de Rome et la quatrième proposition du *De causis*”, V. Cordonier et T. Suarez-Nani (eds.), *L’Aristotélisme exposé. Aspects du débat philosophique entre Henri de Gand et Gilles de Rome*, Fribourg, 2014, pp. 55-81 を参照。このような解釈の相違が起こるのは、『原因論』の著者が、「存在」という語を「第一原因」の意味にも、「第一原因の第一の結果」の意味にも用いているからであるとされる。

て「存在するか (an sit)」という問いでもって問われた際に「存在する」と言われる。このことゆえに、……「存在するか」という問いは第一原因をもってしか規定されえないのである。《存在》は、……「単純」かつ未形成な抱懐物であり、いわば究極的な抱懐物として、そのうちにおいて要素分解 (resolutio) が成り立つのであって、第一原因の創造物であること以外の在り方は可能ではないからである。(De causis et proc. univ., 2. 1. 17; XVII/2, 81, 19-27.) (亀甲括弧内は著者による挿入。以下同様)

アルベルトゥスにとって第四命題が述べている《存在》とは、(能動) 知性によって形成され、或る特定の事物について、「存在する」という述語付けを我々に可能とするところの精神的観念のことを指す。この《存在》は、むろん、神であるところの存在ではなく、第一原因としての神による結果としての存在のことである。アルベルトゥスは、この《存在》が、〈創造されている〉(creatum) という第一原因に基づく規定・限定性以外には如何なる規定・限定性をも持ちえないと言う意味で、単純かつ未形成な精神的観念であるとし、その内において要素分解 (resolutio) が成立することになるとする。すなわち、実在する事物を要素に分解していくと、必ず〈存在者〉(ens) に行き着き、その逆は可能ではないという意味で (Cf. De causis et proc. univ., 2. 1. 17; XVII/2 81, 30-32), 《存在》は究極的な精神的観念であるとされる。

このことから、《存在》が「第一のもの (primum)」と呼ばれる理由も明らかである。《存在》は、自然の秩序においてではなく、知性の秩序において「第一」なのであるが (Cf. De causis et proc. univ., 2. 1. 17; XVII/2 81, 5-7), それの意味するのはつまり、《存在》は、創造されたあらゆる事物に関して、その根源的で第一の要素として我々の知性によって認識されるもの——把握内容 (志向性) を通じて精神に認識されるもの——なのだということである。それゆえ、「創造」という言葉が厳密に解されるなら、すなわち、先立つ何かを基底 (suppositum) とせず無から結果を生み出す作用だと理解されるなら、それは《存在》の産出にのみ当てはまると彼は主張する (Cf. De causis et proc. univ., 2. 1. 17; XVII/2 80, 73-81, 4)。というのも、《存在》に後続するもの (sequentium) については、

その知解内容の内にそれ自身に先行するものが必ず認められる以上、それは「無から創造された」とは見なされ得ず、むしろ、「それ自身の存在の発端 (inchoatio) がそこにあるような何かから産出された」と見なされることになる (Cf. *De causis et proc. univ.*, 2. 1. 17; XVII/2 81, 38-41) からである。このことから、無からではなく、何かを基底として結果を生じさせる原因作用は、「創造」とは明確に区別し、「形成 (informatio = 形相を与えること)」と呼ばれるべきだと彼は強調している (Cf. *De causis et proc. univ.*, 2. 1. 17; XVII/2 81, 41-44)<sup>6)</sup>。例えば「生命」や「知解」は《存在》を有するものとしての何らかの存在者を基底として生じる以上、厳密に言えば「創造」によってではなく、「形成」によって生じる (Cf. *De causis et proc. univ.*, 2. 3. 13; XVII/2 150, 44-55)。創造が関与するのは、《存在》に限られるわけである。

以上のアルベルトゥスの理解から帰結することは次の通りである。すなわち、第一原因の作用としての創造は、我々の知性ないし精神によって把握されるところの《存在》にしか直接関わりを持たず、したがって、現実の世界に存在する諸々の有限的事物とは、少なくとも直接的には関係を持たないということである。つまり、神の創造作用は、或る馬が《存在》を持つことの原因ではあっても、それが馬である原因ではないことになる。馬が馬である原因は、むしろ神以外の二次的な原因に帰せられるべきである。むしろ、これはあくまでも直接的な原因性における話であって、馬が生命を持つものであったり、馬であったりするためには、馬の有する《存在》が不可欠になるという意味で、創造は間接的に馬や生命の原因となっていると理解することは可能である<sup>7)</sup>。

6) 「形成」と「創造」の相違についての詳しい説明は、T. Bonin, "Albert's *De causis and the Creation of Being*", I. Resnick (ed.), *A Companion to Albert the Great*, Leiden, 2013, p. 691 を参照。

7) 創造作用の間接的な原因性を言い表すために、アルベルトゥスは「共に創造されたもの (concreatum)」という概念を利用している。(Cf. T. Bonin, *Creation as Emanation: The Origin of Diversity in Albert the Great's On the Causes and the Procession of the Universe*, Notre Dame/Indiana, 2001, pp. 73f.)

## 2 ヘンリクスにおける知性によって第一に 把捉されるものとしての〈本質の存在〉

次に、第四命題の解釈においてアルベルトゥスとの親近性が指摘されている<sup>8)</sup>ガンのヘンリクスの見解を概略的に確認する。

ヘンリクスは、『定期討論大全』第1項第2問題において、被造的事物について二種の知性的認識があるとしている。第一の認識においては、感覚に続いて起こる「単純な知解内容 (simplex intelligentia)」によって、事物は、それが何であるか (quid sit) というものの把捉なしに、あるがままに認識される。第二の認識では、知性の複合と分割の働きによって、それが人間であるとか色であるといった事物の真理が認識されることになる (Cf. *Summa*, art. 1, q. 2; XXI, 36f., 155–165)。この文脈において、ヘンリクスは『原因論』第四命題を引用した後、次のように説明を加えている。

したがって、知性によって把握されうる第一の把捉内容 (intentio 志向性) は〈存在者〉(ens) の概念である。この概念の知解は、〈存在者〉に関してそれ以外のどの把捉内容も知解されることなくして起こる。というのも、それは、他のどの把捉内容をもそのうちに含まず、むしろそれが他のあらゆる把捉内容のうちに含まれるからである。(Summa., art. 1, q. 2; XXI, 37, 178–181.)

知性によって最初に把捉されるものが存在者であることは、トマスも述べている (Cf. *ST I-II*, q. 94, a. 2) 一般的な見解である。しかし、その場合において重要なのは、存在者が有するものとしての「存在」がどのような含意を持つものとして理解されているかである。ヘンリクスの場合、以下の引用に見られるように、当該の「存在」は、特定の何かであるという把捉内容を完全に排除するものとして理解されている。

だが、ちょうど同じ一つのものにおいて〈何かであること〉(esse

8) Cf. Porro, op. cit.

aliquid) より《存在》(esse) が本性的に先であり、〈何かとして現存すること〉(existere aliquid) より〈現存すること〉(existere) が本性的に先であるように、より先に創造されたのは、何かとして現存するものとしての〈何かであること〉ではなく、現存するものとしての《存在》なのである。このことは、かの『原因論』第四命題……に基づいている。すなわち、《存在》が現存へと産出されるところの創造に基づいているのである。実際、同じ一つの事物において《存在》〈感覚〉〈知解〉などといった複数の把捉内容(intentio)があるのに対し、《存在》はそれ自身より前に如何なる他の把捉内容をも土台とせず、本性的にも知性の観点からしても、第一位の純粹かつ真なる存在により近いものである。実際、複数の把捉内容から複合されたものを解きほぐしていくと、常に《存在》へ行き着くことになる。したがって、《存在》は、第一のものから発出するあらゆるものの内で第一のものであり、本来的な意味で創造という作用を通じた第一原因の結果であり、事物における他のどのものでもないのである。事実、事物における《存在》は、如何なるものへも形成ないし規定されていない精神の第一で単純な抱懷物であって、この抱懷物が他の何かを形成したり規定したりすることはない。何物も《存在》に先立つことはないからである。(Quodlibet X, q. 7; XIV, 171f., 12-26.)

アルベルトゥスと同様、ヘンリクスにおいても《存在》は「精神の単純な抱懷物」である。それは、或る事物が有している一つの把捉内容(intentio)、それも、他のどの把捉内容にも先じた第一の把捉内容である。それは、馬や人といった特定の個であることの徴表となる〈何かであること〉を伴わず、それらより根源的なものとして精神に把捉されたものであり、神による創造が直接的に関与する唯一のものである。この理解においては、「《存在》を有している」と把捉することは、「創造されている」と把捉することと同じである。ヘンリクスはこの第一の把捉内容を〈本質的存在〉(esse essentiae) であるとし、このものだけが本来

的な意味で創造に関わること、および現実に存在する事物<sup>9)</sup>に認められるそれ以外の把握内容は、当該の創造を原因として生じた《存在》の形成 (informatio) によって生じることを強調している (Cf. *Quodlibet X*, q. 7; XIV, 174, 72-76)。

ヘンリクスにおいて〈本質の存在〉は、事物が、神の内に形相として機能する範型を有している限りにおいて、分有しているものであるとされる (Cf. *Quodlibet I*, q. 9; V, 53, 69-70)。つまり、神の内に自らの範型と見なすことができるような形相的イデア (formalis idea) があり、それが不完全な仕方ではあるものの、自らの内に反映されていると理解される限りにおいて、したがって神との「劣った類似性 (similitudo deficiens)」(*Quodlibet X*, q. 7; XIV, 167, 38) が自らの内にあると理解される限りにおいて、事物は〈本質の存在〉を有していると見なされる。

被造物による《存在》の分有を理解する〔正しい〕仕方は、被造物の本質そのものを知性によって抽象されたものとして、存在や非存在とは無関係に理解する仕方なのである。この「抽象されたもの」はそれ自身よりすれば或る種の非存在者なのであるが、神の内に形相的イデア (formalis idea) を有しており、このイデアを通じて、それ固有の本性において存在者となる以前に、神の内でも或る種の存在者なのである。任意のどの事物も、それが神の内なる存在者であることを有しているのは、この仕方においてなのであり、それは『ヨハネ福音書』第1章「生じたものは、そのうちでは生命であった」と言われている通りである。このものは、神がその能力によってその存在者を神が自己自身の内に有する形相的イデアとの類似へと為したときにはじめて現実的存在者となる……。(*Quodlibet I*, q. 9; V, 49, 53-61.)

この引用から理解されるべき事柄は以下の二点である。一つ目は、被造物が分有している《存在》(=〈本質の存在〉)は、現実世界に存在しているかどうかという意味での存在に対して中立的な状態にあると理解

9) ヘンリクスは “res sive essentia creaturae” という仕方で、しばしば「事物」と「(被造物)の本質」を互換的に用いている。



されることである。すなわち、現存する事物の本質を知性によって分析すると、それが神において形相的アイデアを持つという要素は欠くべからざる条件であると考えられるのに対して、現実世界に存在するかどうかという要素についてはそうではない。というのも、神の内にその範型となるアイデアを有さないものが、この世界に何かとして存在している事態は想定不可能であるのに対し、神の内に特定のアイデアがあり、そのアイデアが現実世界におけるどの事物においても反映されていないという事態は十分に想定することができる (Cf. *Quodlibet I*, q. 9; V, 57, 56-59) からである。

二つ目は、「創造」とは、神が自らの知性認識活動を通じてアイデアを生み出すことそれ自体ではなく、あくまでも〈本質の存在〉を現実世界における個々の事物のうちへと実現することなのであるが、しかしそれは「被造物に現存 (existentia) を齎すことが創造である」ということをそのまま意味するものではないということである。なぜなら、事物には〈本質の存在〉だけではなく、それを受け入れる受け皿としての〈何かであること〉(esse aliquid) (Cf. *Quodlibet X*, q. 7; XIV, 170, 91-92) も属しているのではあるが、この〈何かであること〉を現実世界へと齎すことは、厳密に言えば、「創造」に含意されるものではないからである。〈何かであること〉は、〈本質の存在〉の形成 (informatio) によって生じるものと理解されなければならないのである。その意味で、創造の与える《存在》によって個々の被造物の可能的本質が現実化され、被造物が現実世界のうちへと齎されると言うよりは、神がその知性的生命の内であらゆる事物のアイデアを認識しているという絶対的基盤があり、その根源的な条件付けのもとで個々の被造物が諸原因により生成消滅するという事態が生じていると考えるのがより適切である。この意味で、〈本質の存在〉は一切のものが現実世界で存立するための根源的条件であり、被造物における「第一のもの」なのである。

ヘンリクスは、以上で述べた被造物による《存在》の分有を、ボエティウス以来の“quo est” (= 存在せしめるもの) と “quod est” (= それであるところのもの) という用語を用いながら、〈本質の存在〉と〈何かであること〉との一種の複合として説明している。

〈本質の存在〉は本来の意味では〔被造物の〕本質に付加されると言われない。なぜなら、本質はこの存在なしには本来の意味で存在しないからである。むしろ、自己の類に固有な規定に由来する (de propria ratione generis sui) 何かに対して付加されると言われる。このものは、《存在》の規定と共に、“quod est”と《存在》——これは“quo est”である——とから複合された本質を構成する。(Quodlibet X, q. 7; XIV, 152, 59–63.)

“quo est”としての〈本質の存在〉が基盤となり、その基盤において“quod est”としての〈何かであること〉が様々な様態において成立することによって、種々の被造物がこの現実世界に存在することになると理解されているわけである。

つまり、これら両者ともに事物にとって欠かせざる構成要素であるのだが、〈本質の存在〉は、そもそもそれなしに事物は存在を持たない無としてしか理解されえない——神の内なる知性的生命に由来しないものは、存在すると見なされることはないだろうから——ものである。そのため、〈本質の存在〉は、事物それ自身に固有化されるようなものとは見なされえず、むしろ、事物の実在レベルにおける現実性を超越したものに由来すると理解される。その意味で、形相的に (formaliter) ではなく、あくまでも分有的に (participative) 所有されているとされる。それに対して、〈何かであること〉は自己に固有の類に属する、すなわち自己に固有化されるものと見なすことが可能である。つまるところ、事物は、自己と同類のもの (=quod est) と自己を超越するもの (=quo est) との複合において現実世界に存在していると見なされるわけである。

### 3 エックハルトにおける《存在》(esse) と 〈これであること〉(hoc esse) の峻別

以上で確認してきたアルベルトゥスとヘンリクスの考え方、とりわけ創造が与えるものとしての〈本質の存在〉というヘンリクスの概念から、エックハルトの考えを理解するうえで重要な視座を得ることができ。それはすなわち、創造によって神から与えられる《存在》によって被造物は《存在している》(est) のであり、《存在者》(ens) であるのだ

が、この神からの《存在》の授与は、特定の個物である限りの事物に認められるものでは決してないということである。二人の先哲の理解は、《存在》と〈これであること〉(hoc esse)、ないし《存在者》と〈この存在者(これであるもの)〉との間にある断絶の強調において明白に表れることになる。

さらに、〈存在者〉〈一〉〈真〉〈善〉はあらゆる事物において第一かつ共通的であり、そのために、これらは、万物の第一かつ普遍的な原因ではないような原因……が到来する以前に、万物に臨みかつ内在しているのである。またさらに、これらが〔万物に〕内在するのは、ただ万物の第一かつ普遍的な原因によっている。しかしながら、このことによって、二次的原因からその影響力が取り去られることはない。というのも、火の形相は火に《存在》(esse)を与えるのではなく、〈これであること〉(hoc esse)を与えるのであり、〈一であること〉を与えるのではなく、〈この一なるものであること〉を与えるのだからである。(Prol. prop., n. 11; LWI-1, 171, 11-172, 1.)

火の形相は火に「火であること」を与えるが、こうした〈これであること〉の授与の根底には、神による《存在》の授与があり、これが基礎となっている。第0節で挙げたエックハルトの引用で「創造可能性の説明根拠は《存在》である」とされていたように、〈これであること〉の授与以前に行われる《存在》の授与こそ、神と被造物との間に存する唯一の接点である。

このような理解を基に、エックハルトが導き出している帰結は以下の通りである。すなわち、被造物は〈この何か〉(hoc)として《存在》を有しているわけではなく、したがって、〈この何か〉として神とのつながりを有しているわけではないということ (Cf. *Serm. XXV*, n. 264)。〈この何か〉である限り、被造物は《存在》を受容する資格を持たず (non esse capax)、あくまでも自らや他の被造物への秩序から切り離され、ただ神への秩序にあるものとして (solum ut in ordine ad deum) 理解される限りにおいて、被造物は《存在》の受容資格を持つということ (Cf. *Serm. XXV*, n. 266)、である。その際、「ただ神への秩序にあるものとし

て」という言葉が意味することは、ヘンリクスにおいて確認したように、「神の知性の内にそれ自身のアイデアがあると見なしうるものとして」と理解されねばならない。

《存在》と〈この何か〉とを以上の仕方では把握することは、一方で被造物それ自体の完全な無性の強調を可能にすると同時に、他方で、神の内における知性的生命の強調をも可能にしている。

“omnia per ipsum facta sunt, et sine ipso factum est nihil”。この言葉の意味は、或る解釈に基づくなら、すべての〈生じたもの〉(factum)——自然物にせよ人工物にせよ——は、〈それ〉(ipsum)を通じて《存在する》(sunt), すなわち《存在》を有している (habent esse) ——《存在する》と《存在》とは、様々な事柄を付随的に意味表示するものの、同じ対象を〔主要的に〕意味表示する——のであり、このことが続く言葉 “sine ipso factum est nihil” の意味である。というのも、……すべての〈生じたもの〉——人工物にせよ自然物にせよ——は《存在》を与える神なしに (sine deo) は〈無〉(nihil) であるからである。(In Sap., n. 19; LW II, 340, 4-10.)

ここでは、自然や人間を原因としてこの世界に実在するものが〈生じたもの〉であるとされているが、その際、この〈生じたもの〉は無というよりは無的なものとして、それ自体で何らかの存在性を持つものであるかのように説明されている。この〈生じたもの〉に《存在》を与えているものが神であり、神なしには、〈生じたもの〉は「存在している」と述語付けされえない無なのである。

このような解釈が可能なのは、エックハルトにおいて、時間と空間によって制限されえない知性的・精神的次元に属する《存在》と、それらに制限された次元に属する〈この何か〉とが明確に区別されているからである。なるほど、〈この何か〉に与えられているものとして《存在》を理解するなら、それは「形相的存在 (esse formale)」などと呼ばれ、〈この何か〉の内に備わり、それを現実世界に存在せしめているものと見なされる (Cf. In Sap., n. 32)。その場合、確かに《存在》は、〈この何か〉として時間と空間の内にある被造物の内に備わっていると見なされ

るだろう。しかし、それは、我々の知性が把握する一つの観点として備わっていることを意味するに過ぎず、現実態のようなものとして事物を形成するものとは決して見なされえない。被造物はなるほど神の内なるアイデアを反映している限りで《存在》を有しているのであるが、この《存在》は“quo est”として、被造物自身とは異なる超越的なものに由来しており、被造物自身に固有なものとして帰属するとは見なされえないものである。それに対して、被造物に固有なものとは見なされる“quod est” (Cf. *In Gen. II*, n. 34) は、“quo est”との関係抜きで自体的に見られる限り、存在を有さない無的なもの、すなわち無<sup>10)</sup>なのである。

もちろん、被造物の《存在》を〈この何か〉に備わるものとして考察する視点の反対側には、それをそれ自体として捉える視点、すなわち特定の被造物が有するものとしてではなく、知性によって時間と空間を捨象したものとして考察する視点があり、そのような視点からは、《存在》は永遠の相で把握されることになる (Cf. *Prol. Gen.*, n. 9)。そして、知性によって把握されるそのような《存在》とは、ヘンリクスが説くところの〈本質的存在〉に他ならない。それは、第0節で示した引用において言われていたような、「神の内なる創造不可能な生命」を根拠としてのみ被造物に述語付け可能なものなのである。

#### 4 A・ケロ＝サンチェスの解釈とその問題点

エックハルトの存在概念については、ヘンリクスとの親近性に基づいて体系的に論じているケロ＝サンチェスの先行研究<sup>11)</sup>が存在するが、彼の研究は「創造が与えるところの《存在》」という観点が抜け落ちていたために不完全な点が残る。それは、彼がヘンリクスの言う〈現存の存在〉(esse existentiae)を“Dasein”と訳している (S. 52) 点に現れている。

ヘンリクスにおいて、〈現存の存在〉は〈何かであること〉(esse aliquid) すなわち「限定性」とは明確に区別されており、必ずしも「そこにあること (da ist)」, つまり「知性の外なる現実世界に存立している

10) エックハルトはしばしば、「純然たる無」である被造物が、「無的なもの」としてそれ自体である種の存在性を持っているかのように語っている (Cf. *Pr. 4*; DW I, 69, 8-70, 4)。

11) A. Quero-Sánchez, *Über das Dasein: Albertus Magnus und die Metaphysik des Idealismus*, (MEJ Beihefte 3), Stuttgart, 2013.

こと」という意味での「現存在」と同定できるものではない。実際、ヘンリクスは、〈現存の存在〉について、或る被造物が作出因としての神に拠って齎された結果 (effectus) だと見なされる限りで、その被造物の本質に当てはまるものだとしている (Cf. *Quodlibet* X, q. 7; XIV, 151, 53–56)。つまり上で確認したように、〈この何か〉として現実世界に存立していることそれ自身は、自然などの二次的諸原因に基づいていると理解されるのであるから、或る馬が現実存立していること自体は、あくまでも直接的には自然の諸原因によるのであって、ただその馬が根源的には神によって作出されたのだと理解される限りにおいて、被造物は〈現存の存在〉を有しているとされるわけである。それゆえ、厳密に解される限り、〈現存の存在〉は「作出因としての神を自らの根拠として持つこと」を主要な含意として持ち、「現実世界に存立する」という含意を伴うものの、それはあくまでも副次的なものと理解される。

それゆえ、ヘンリクスが、根源としての神を示唆するところの《存在》や“*quo est*”について語る際に、〈現存の存在〉を一つの意味内容として含めることはありうるだろう。厳密に解される限り、〈現存の存在〉は根源としての神の原因性のみを表示するからである。だが、知性によって第一に把捉されるものとしての《存在》について語られる場合には、それはあくまでも〈本質の存在〉のみを意味表示していると考えべきである。というのも、上で確認したように、或る事物が「存在者である」、「存在している」と把握されるのは、「神に作出されて現実世界に存立している」という事実に基づいてのことではなく、その事実を通じて知性に抽象的な仕方では把捉されるところの「神の内に根拠としてのアイデアを持つ」という事実のみに基づいてのことだとヘンリクスは考えているからである。我々は確かに現実に存在している事物を見て「存在している」と言うのであるが、そうした言明がそもそも可能なのは、我々の知性が「第一の認識」(第2節の冒頭部を参照)において、神の内なる形相的アイデアとの類似性を洞察したからこそである。

以上の解釈に基づくなら、エックハルトの以下の引用も適切に解釈可能となるだろう。

「始原において神は天と地とを創造した」、すなわち、神は“*quo est*”

と“quod est”という二つの原理を創造したのである。実際、これら二つは、あらゆる被造物において……二つであって、一つではないのである。その理由は、他者から存在するあらゆるものは、創造されたものであって、《存在》ないし“quod est”を他者から有しているのに対して、“quod est”ないし何性は他者から有してはいない（アヴィケンナ）からである。実際、人間は、人間は動物であるということ<sup>1</sup>を他者から有しているわけではなく、事実、如何なる人間が〔現実世界に〕置かれようが置かれまいが、〈人間は動物である〉は常に真なのである。だが、人間は、〈人間は存在する〉ということ<sup>2</sup>を他者から有している。（*In Gen. II*, n. 34; LW I, 502, 4-12.）

ケロ＝サンチェスは、この箇所で言われている“quo est”について、それがヘンリクスという〈本質の存在〉のことを意味するのであって、「作出因としての神から一時的に貸し与えられている現存在（das von Gott als Wirkursache für eine Weile verliehene Dasein (*esse actualis existentiae*）」（S. 357）を意味するのではないと述べているが、ここで“quo est”と言われるときには、〈本質の存在〉だけではなく、〈現存の存在〉もまた含意されるだろう。ここでは、実際に現実に存在している事物に関して《存在》や“quod est”が問題となっているからである。そのような個物に帰属するものと理解され、したがって抽象的な相において理解されていない限り、「作出因としての神の原因性」をそれらの語の含意から排除する理由は見当たらない。すでに引用した箇所（*In Sap.*, n. 19）でエックハルトが述べていたように、「《存在する》と《存在》とは、様々な事柄を付随的に意味表示する（*consignificare*）ものの、同じ対象を〔主要的に〕意味表示する（*significare*）」のであり、したがって、「存在」が「神によって現実世界に作出された」という内容を付随的に意味しても不都合は生じないのである。むしろその際に、「存在」が<sup>3</sup>主要的に意味表示するものが、創造を通じて神から直接贈与されているところの《存在》のみであること、ヘンリクスの言う〈本質の存在〉のみであることは、これまで論じてきたことから明らかであろう。

## 5 おわりに

以上で確認してきたことから、エックハルトがなぜ、神の内における一匹のハエが実在世界に存在する最高位の天使よりも高貴であると主張できたのかを正確に説明することが可能となる。すなわち、被造物は時空によって制限された次元に属するものとしてそれ自体で見られる限りでは、《存在》を有さず、したがって一切の《存在》性を欠いた「純然たる無」でしかない。その限りでは、実在する或る天使も、実在する或るハエも、同じ仕方でもないのであり、ゆえにそれらの生成消滅は、共に、神の《存在》性に何らの変化も齎さないであろう。神の内なる知性的生命のみが真に《存在するもの》——“solus deus proprie est ens” (*Prol. prop.*, n. 4) ——なのであり、それに由来すること、つまりそれが自らの根源であることを示唆する限りで、被造物は《存在》を有すると見なされるのである。

このような見方は、トマスからは決して出てこない。なぜなら、トマスにとって「存在」という語は、「事物をこの何かとして存立せしめるもの」を主要な含意として持つからである。トマスの場合、被造物は、この世界に実在するものとして存在を有し、存在者である (Cf. *ST*, I, q. 5, a. 1, ad 1)。むろん、この意味での「存在」が創造の直接与えるところのものだとトマスが考えていないことは、「創造は存在を与える」というテーマが——エックハルトらとは異なり——トマスにおいて主題化されていないことから明らかである。

エックハルトが神の内なる事物の理念を強調した背景には、「存在」という語を、万物の根源であるところの〈一なるもの〉に直接由来するもの、したがって、時間と空間とに一切規定されえず、個々の被造物によって分割所有されえないア・プリオリでイデア的なものとして理解しようとするプラトニズム的な存在理解があったのである。